

横浜ナザレン教会復活節第二主日(4/11)礼拝

「解放の時を待つ」

ルカ福音書第21章25節から28節/ペトロの手紙Ⅱ3:8~13

ルカによる福音書 21:25 「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。26 人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。27 そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。28 このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

ペトロの手紙Ⅱ3:8 愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。9 ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。10 主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。11 このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。12 神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。13 しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。

1 エルサレムの神殿で

先週はイースター礼拝で、ヨハネによる福音書の第二十章、疑い惑うトマスに対して、甦りの主イエスが「信じない者ではなく、信じる者となりなさい」と招かれたというエピソードに聴きました。今日は、ルカ福音書に戻りまして、受難週に聞いたエルサレム滅亡預言の次に主イエスが語られた言葉に耳を傾けていきたいと思います。ゆきつ戻りつで、恐縮なのですが、ルカによる福音書が語る今日の場面は、主イエスが十字架に架けられる数日前です。所はエルサレム神殿の境内。言ってみれば、ユダヤ人の総本山のようなところで、エルサレムの滅亡を預言するのですから、主イエスは実に大胆なお方だと思います。そこには、弟子たちだけではなく、なんとかして一人でも多くエルサレムの滅亡から救いたいと言う主の思いがあったのかもしれませんが。ローマ軍の軍隊がエルサレムを包囲しそうになったら、ためらわずに逃げよ！エルサレムの外にいる人は入ってはならない、と主は何度も人々に呼びかけます。

当時のユダヤの人々は、エルサレムこそダビデの時代から続く神の都と信じて疑わず、心のよりどころとしてきました。ですから、「エルサレムが滅亡する時こそ世界の終わりの時、

救い主メシアの再臨の時」と受け取る人も少なからずいたのではないのでしょうか。ですが、主イエスは「エルサレムが滅亡してもまだ世の終わりではない」ということを強調するように、「それから」と続け、終わりの日の模様を語ります。

## 2 世の終わり

世の終わりを語る時、私たちはどこか遠慮がちになります、腰がひけます。その背景には、カルト教団が、盛んにこの世の終わりを強調し、「信じなければ滅びる」と脅して信徒を獲得しているという現実があります。「自分たちもそんな集団だと誤解されるのは嫌だ」と考えて、そこを避けて通るような傾向が生まれたのでしょうか。また、来るか来ないか確証のない「世界の終わり」を考える事は、合理的でも理性的でもない、古代人ならいざ知らず、科学技術が発展した現代人が、終わりの日などという荒唐無稽なことは受け入れがたい、と考えているふしもあります。私もかつてはそうでした。

しかし、本当に、世界の終わりを考えることは、非合理的な事なのでしょうか？ある神学者が次のように言いました、「この世界は、癒し難く病んでいる、病を根本的に癒す薬を与えられずに、見せかけだけの治療をされて、死を待つしかない病人のようだ。」私もそのとおりだと思います。例えば、世界の少女達を助ける働きをしている NGO が寄付を募る為に制作した動画広告を見て、言葉をなくした事があります。その動画には、伏し目がちに話す15, 6歳の少女が映し出されています。彼女は、十歳の頃、一万円で売春宿に売られたそうです。字幕が出ます。「彼女の命の値段は、私が着ているワンピースの値段とそう変わらなかった」。同じような境遇の少女達がこの世界には何万人といる、その一方でなに不自由なく暮らす者達もいる。この不均衡一つとっても、抜本的な解消は気の遠くなるような話しです。人間の力では如何ともしがたい。利害が複雑に入り組んでいるから。人間扱いされず動物のように売り買いされる少女達となんの関係もない時、人は献金や寄付をすることもできるでしょう。しかし、それが自分の生活に関わる事になったら、どうでしょう。そんな人間達の存在があつて、自分の生活が成り立っているとしたら…。同情はするかもしれませんが、自分の生活を壊してまでも、彼女達を悲惨な状況から解放しようとする人は極わずかでしょう。この世界はそんな、私達人間の罪による不正義で満ちています。そして、弱くされている人・小さくされている人が罪を犯さないか、というと、そうではない。弱く貧しいからこそ犯す罪があり、富んで強くあればこそ犯す罪があります。しかも、人の罪はウィルス以上の感染力を持ちます。「やられたらやり返せ」とばかりに憎しみが憎しみを産む、家族の間でさえ醜い争いを繰り広げ、疑心暗鬼になって心安らぐ暇もない。環境破壊による地球温暖化で気候不順は当たり前になり災害も頻発しています。一人一人の自己中心という罪がつくり上げた死の世界。そんな人の罪が複雑に絡み合つて、この世界をがんじがらめにしています。「この社会の本当の姿は、底辺から見上げればよくわかる」と語ったブレイリー・ミカコさんがいのように「腐った泥水のような世界」、人の手では癒し難い、死を待つ病人のような世界です。

自分の病が重い人が、自分の終わり、死を考える事は、ごく合理的なことです。そうであれば、また、「癒し難く病んでいる世界」の終わりをそこに生きる者達が考える事は、合理的な事では

よう。死と罪に支配され病んだ世界はいつか終わる、そう考える事は実に合理的なこと、当たり前のこと。

### 3 父なる神の家に

しかし、世界の終わりの時は、あらかじめ具体的に思い描けるようなものではありません。自分の死を人間が具体的に正確に思い描く事ができないように、世界の終わりの様子を知る事はできないのだと思います。そして、この世界の終わりの時は、既に始まっています。イエス・キリストそのお方が世の終わりをこの世界にもたらしてくださいました。

生きる気力をなくすような、絶望を積み重ねるしかないようにさえ思えるこの世界に、最もふさわしくないお方、神の御子は来てくださった、そして深い闇の中に輝く光として、まことの人となって来てくださいました。私たちが受けるべき滅びを神の御子であり、まことの人であるこのお方が、先立って受けてくださった、十字架に滅んでくださいました。そして、父なる神は、このイエス・キリストを、十字架の死から三日目、日曜日の朝に永遠の命へと甦らせてくださいました。そうして、この罪と死の世界の只中に、新しい命、永遠の命が突入してきたのです。更に、このことを信じる者に、父なる神と子なる神は、神の子の霊、聖霊なる神をお与えてくださいます。そのようにして、この世界に神の国を打ち立て、広げようとしてくださいます。この世に始まった神の国こそ、終わりの時に生きる者達、神の支配下に生きる者達の集まりです。

だって、そうでしょう。前にも言いましたが、「敵を愛せ」に代表される主イエスの教えは、罪と死が支配するこの世の生き方では、到底、守れる教えではありません。死に取り囲まれ、罪が力を奮うこの世にあって、敵を愛していたら滅ぼされてしまいます。この世の時を生き、神の支配下ではなく人の世の支配下にあるのであれば、「敵を愛する」なんてことは到底不可能です。ですが、主は仰る。「あなたの敵を愛しなさい」。それは、「この死で取り囲まれたこの世の時を生きるのではなくて、終わりの時を生きなさい、神の支配のもとに、私と共に生きなさい。あなたには確かに敵を愛することなど出来ない、しかし、私には不可能はない。私の復活の命があなたに与えられているのだから、私に委ねて生きなさい」と、主イエス・キリストが私たちに対して、終わりの時に生きる決断をするように、という招きなのだと思います。

そのようにして、主イエスは、弟子たち、私達を、罪と死に支配されたこの世の時ではなく、神の支配下にある終わりの時を具体的に生きる者として導いてくださいます。主イエスの永遠の命を生きる者としてくださるのです。だから、自分の命が、神の支配下にあり、終わりの時を生きる、ということは、私達も確認することができます。天地万物を造られた唯一の神を、「アッバ、父よ！」と叫ぶ時は、私達の内に見えないイエス・キリストが与えられている、つまり、私たちは、神の支配下において終わりの時を生きている証です。そうして、神は、「あっぱ、父よ」と叫ぶキリスト者を用いて、死と罪の世界の只中に、神の家を建てあげてくださいます。

神の家がどんな家なのかを思い浮かべる時、とても楽しくなります。そこには死と罪の陰は、微塵もありません。命はあるがまま命として尊ばれ、差別もない痛みもない家。この世で小さくされ弱くされた人々が、自分の命を喜べる家。誰も自分の欲望の為、他人を利用しない家。誰と

でも心を開いて正直に話すことができる家、広くて大きくて住み心地のよい父の家。誰もが、神に愛されているのを喜びつつ、お互いを尊び合える家。心からくつろげる場所。冬あたたかく、夏涼しく、父なる神の愛の眼差しの中に幼児のように憩う家。

ですが、私たちが自分達に与えられた神の子の声に耳を傾けず、自分に都合のよい思いに生きる時、私たちは死の世界に逆戻りしてしまいます。肉の体で、罪と死が支配する世界を生きるという事はそういうことであり、私たちは自分の体を、心を持って余して、天の父なる御神に助けを叫ぶこと度々です。この事を使徒パウロはローマ書で次のように語ります。ちょっと長いのですが引用します。「**被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです**」(ローマ書8：22-26)。実に私たちの内に生きて働いてくださる聖霊の呻きが、死と罪の世界に神の国を広げていく、終わりの時を引き寄せると言えるでしょう。そのようにして、私たち一人一人が、神に用いられるのです。

#### 4 主の再臨の時とその目的

さて、今日のルカによる福音書の主イエスの言葉は、必ず来るというその世の終わりを主が語ったものです。2000年前の古代人が理解しやすいように、彼らの世界観にあわせて、イエスは語っておられます。どういう世界観かという、次のようなものです。平たい円盤のような地の上に、球体を半分に割ったようなドーム状の天がはりついている、太陽や星や月などの天体はそのドーム状の天の中を動いていると考えられていたようです。地の下に広がるのは、死者の国、陰府です。ルカ福音書の26節の「**天体が揺り動かされる**」というのは、全世界が枠組みごと、ぐらぐらと揺り動かされ、世界が大きく壊れていくイメージと言ってよいと思います。もう一か所、ペトロの手紙Ⅱでは、「**天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。**」(10節)とあります。

主イエスや使徒ペトロが、今生きていて、現代人の私たちに語ってくださるとしたら、「**全宇宙的な滅びの出来事が起こる**」というような表現となるかもしれません。何百億光年というような気の遠くなるような広がりを持つ宇宙全体が壊れていく。その時、私たち人間は、自分達が被造物である事をはっきり知るでしょう。人間では、くい止める事など到底不可能な全宇宙を巻き込んだ破滅が起ころうとしているのですから。最初に造られた古い世界は、間違いなく没落し滅んでいくのです。で

すが、世の終わりが実際にどのようなものか、具体的に、いつ、どのようにやってくるのかを思い浮かべる事は、できません。ペトロの手紙Ⅱ 3：8によると、神において時間が伸びたり縮んだりしているようですし、盗人のように、と語られているのは、終わりの日が予測できない時に来るという事を示しているからです。

ですが、私たちは、ここでイエスの恵みの言葉を聞きます。「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」私たちが世の終わりの日に向かい、最後の朝を迎えようとしているのは、私たちの救いの為、肉の体から解放され、神の子の命に完全に与るためだ、と主は仰るのです。この世界の苦悩は、世界そのものと共に、終わりを迎えると約束してくださいます。この言葉を読んだルカの教会の人々は、実に心励まされたと思います。ルカ福音書が成立したのは、紀元後80年代ではないかと言われています。その頃の教会は、ローマ帝国からもユダヤ人からも迫害を受けていました。罪と死に取り囲まれた世界で厳しい試練の時を迎えていました。涙にぬれて「何故ですか？神さま、いつまで待てばいいのですか？」と嘆き額づく事もあったでしょう。その時、彼らは、「身を起して頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ」という主の力強い約束が、彼らをどれほど励ましたか、希望を与えたでしょうか。罪と死に支配された世界が壊れ去る時、主イエスは必ず再び来てくださる、あなた達一人一人を救うために！私は、そのように罪人である私達を深く慈しんでくださるイエス様に、心底、お会いしたいです。

## 5 待つこと

教会は、代々の聖徒達は、私達は、身をおこし頭を上げ神の御国が目に見える形でやってきて、罪と死の世界から完全に解放される時を待っています。待ち続けています。その日は確かにやってきます。しかし、いつ来るかは、分かりません。主イエスにさえ分からない、天の父なる御神だけがご存じです。だから、私たちに必要な事は、その日がいつ来るか知ろうとすることではありません。解放の日が早く来るように、と祈ることです。ひたすらに真剣に、再び来られる主イエスを待ち焦がれて祈ること、それが父なる神に、主イエス・キリストに求められています。そして、確かに私たちは今朝もその祈りをささげました。主の祈りです。「天にまします我らの父よ、御国が来ますように、御心が天になるように、地にもなりますように。」

しかし、どうして神はすみやかに来て下さらないのでしょうか。幾多の信仰者が待ち焦がれていましたし、今も待っていますのに。その理由は、今日のペトロの手紙Ⅱに記されています。おそらく、「どうして神は速やかに来てくださらないのか」という疑問は、紀元後100年前後の教会の中にもあったのだと思います。その疑問に、使徒ペトロの弟子だと思われる人がこう答えています。「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。」

そうです、まだ終わりの日が来ないということは、神がまだまだ世界をあきらめてはおられな

いという証です、人間をあきらめてはおられない。何とかして少しでも多くの者達が、ご自身のもとで新しい命を生きる事ができるように、切に願っておられるのです。だから、私たちも、一人でも多くの方が、イエス・キリストと出会ってまことの命に生きる為に、イエス・キリストを証ししつつ、終わりの日を待つのです。

そこには多くの試練があります。何とか私たちを神から遠ざけようと、死と罪の世界も必死です。しかし、私たちには、父なる神を「アッバ、父よ！」と叫び求めるイエス様の霊が与えられています。恐れることはありません。そして、終わりの日を待つその間に私たちはますます、イエス・キリストのこと、神のことを知ります。神に愛され守られてある自分を知ります。横浜ナザレン教会の愛する信仰の仲間達と共に、イエス・キリストを証ししつつ、イエス・キリストの再臨を待ち続ける事ができますように、と父なる神に願っています。